

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	本間 美里
2. 審査委員	主査：(上越教育大学教授) 松本 健義 副主査：(岡山大学教授) 泉谷 淑夫 委員：(兵庫教育大学教授) 初田 隆 委員：(上越教育大学准教授) 松尾 大介 委員：(上越教育大学准教授) 伊藤 将和
3. 論文題目	対話による美術鑑賞活動における学習過程の記述分析に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 本間 美里 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年 2月 11日(土) 13時35分～14時00分          場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 講義室4</p> <p>1. 学位論文の構成と概要          本論文は、序章、終章を含む全6章により構成されている。</p> <p>序章 問題の所在と研究の目的及び方法と本論文の構成          第1章 対話の中の学びと美術鑑賞活動            第1節 学びの意味生成過程            第2節 対話の構造と鑑賞活動における学びの過程            第3節 対話のもつ触発性          第2章 対話による鑑賞活動の理論と実践          第3章 対話による鑑賞活動における学びの過程の記述分析－経験・語り・知覚の連鎖による学び－            第1節 対話と相互行為－記述分析 [1] 上田薫《なま玉子B》－            第2節 対話と書く行為－記述分析 [2] ルネ・マグリット《アルンハイムの領地》－            第3節 対話と表現行為－記述分析 [3] ジュゼッペ・アルチンボルド《四季・夏》－            第4節 対話の活動構成－記述分析 [4] マルク・シャガール《私と村》－            第5節 対話の場と鑑賞活動－美術館での鑑賞活動－              1. 記述分析 [5-①] アントニー・ゴームリー《反映／思索》              2. 記述分析 [5-②] 高松次郎《No. 273(影)》              3. 記述分析 [5-③] 白髪一雄《天慧星拚命三郎(水滸伝豪傑の内)》          第4章 対話による鑑賞活動の学習過程モデルと学習環境デザイン            第1節 対話及び相互行為としての鑑賞活動            第2節 協働的で相互作用的な鑑賞活動の学習環境デザイン          終章 研究の成果と課題</p>

## 2. 審査経過

本研究の審査は、次の観点について行った。

### (1) 研究目的の妥当性と論文構成の整合性について

本研究は、平成20年度以降小学校図画工作科の授業で実践されている対話による美術鑑賞活動の記述分析により学習過程の基本モデルを措定し、このモデルに基づき、対面型と一斉型の二つの視点から4つの対話による鑑賞活動の授業を構想実践し、活動の実践的關係と過程の特性に応じた事例の相互行為分析による記述分析を行うことで、対話による鑑賞活動における子どもの学びの過程を明らかにすることを目的としている。

序章では、問題の所在、研究目的、研究方法、論文構成を示している。

第1章では、対話による鑑賞授業における学習過程を、本間・松本・新関（2013年）で示した〔＜経験-語り-知覚＞と＜テキスト=作品＞〕モデルにおける、＜テキスト=作品＞を媒介とした、語りやふるまいを起点とした＜経験-語り-知覚＞の連鎖の生成による作品の現象（意味）と位置づけている。学習者における自己の生成である＜経験-語り-知覚＞の連鎖と、＜テキスト=作品＞の現象の相互的なつくり変わりが、対話による鑑賞活動における学習過程の具体的な現われである。対話による鑑賞活動では、作品を媒介にして行う対面的な語りや相互行為（ふるまいや表現行為）において、個々人の経験・語り・知覚がおのずと立ち上がり新たなものへとつくり変わっていくこと、また、ある参加者の語りが別の参加者の経験・語り・知覚のいずれかを連鎖して立ち上げていく「触発性」が認められる。この触発性について浜田寿美男の対話における「話す-聞く」関係、「三項関係」「四項関係」における対象の協働形成と、デリダの「自己-触発」に基づき、作品を媒介にして行う「語り」を機軸として知覚と経験が相互的に生成される「対話の生成モデル」定義し、さらにロラン・バルトのテキスト理論の立場より「鑑賞活動における個の学びの過程の措定的モデル」として仮説的なモデル化をしている。

第2章では、鑑賞活動に関する理論と実践について、特に美術鑑賞活動の場と方法の観点から、美術館における鑑賞活動と学校における鑑賞活動について、先行研究を整理し、本研究の位置づけをしている。

第3章では、対話による鑑賞活動における学びの過程の相互行為分析による記述分析を事例〔1〕により析出した「措定的モデル」に基づいて研究開発した4件の授業実践から6つの事例を取り上げて記述分析して考察している。事例〔1〕から事例〔4〕は、複製作品による教室での鑑賞活動である。事例〔5〕の3事例は美術館でのオリジナル作品による鑑賞活動である。事例〔1〕と事例〔5〕の3事例は教師がファシリテーターをする一斉型の活動であり、美術館や教室で数多く実践されている対話による鑑賞の形式である。事例〔1〕からは、事例の記述分析により「対話による鑑賞活動における個の学びの過程の措定的モデル」を作成し、〔2〕から〔5〕までの授業実践における学習活動の研究開発の根拠としている。美術館での鑑賞活動である事例〔5〕では、児童はファシリテーターである教師へ語るだけでなく、作品を媒介として児童間でのふるまいや語りも相互に連鎖させて、作品の現象と経験や知覚を相互につくり変えていく過程が多数見られた。事例〔2〕、〔3〕、〔4〕は複製作品によるグループでの対面型鑑賞活動である。事例〔2〕では、複製作品と作品の周囲に書かれたことを媒介とした自他の語りやふるまいにより触発される行為の過程の記述分析による考察をしている。事例〔3〕では、ものをつくるふるまいをとともなう対話による鑑賞過程を分析記述し考察している。事例〔4〕では、3名による対面関係での活動過程を、対話による触発過程を明らかにするためのグループ構成の最小単位として記述分析した。事例の分析記述においては、現象学やエスノメソドロジーの手法に基づく画像を用いた相互行為分析を、対話の実践関係と連鎖及び作品の現象との相互的生成関係に応じて実施し、鑑賞行為が作品を媒介にした対話を通して形成され、作

品が現象していく過程を可視化している。

第4章実践結果と考察では、第3章での記述分析結果から「指定モデル」を再構成し、「鑑賞授業における個の学びの過程モデル」を〔＜経験－語り/ふるまい－知覚＞と＜テキスト＝作品＞〕として示した。学びの過程モデルに基づく協働的で相互作用的な鑑賞活動の学習環境デザインのあり方を示している。また、対話による鑑賞活動の相互行為分析が教育実践研究においてもつ意義について、①対話的な実践関係に着目した学習活動を機軸とした教育実践研究、②芸術作品への実践的関与を通じた芸術経験と文化的知覚の協働形成の二点より示している。

#### (2) 研究の独創性と発展性について

本研究の独自性は以下の三点である。

①対話による鑑賞活動での美術作品の現象と、鑑賞者たちの見方、感じ方、表し方、ふるまい方の触発とつくり変わりとを、作品と他者との語りやふるまいとに二重に媒介された相互作用・相互行為による学びの過程として、これをテキストモデルにより言語活動の視座からモデル化し、このモデルに基づいて対話による鑑賞活動を構想実践し、収集事例の記述分析の成果より、対話による鑑賞活動の学習過程モデルを再構成して示した。

②主観的で内的な過程とされる芸術教育における鑑賞活動を、個人活動モデルから芸術作品と語りやふるまいとに二重に媒介された社会的文化的な相互行為モデルへと転換して位置づけたことで、作品を媒介として他者とともに言う言語行為やふるまいの関係と過程、芸術作品に対する見方、感じ方、考え方、表し方、ふるまい方が、社会的に形成されていく学習活動の実践形式が観察可能となることを示した。

③対話による鑑賞活動を学習過程の視点で位置づけ、その過程を記述分析したことである。その際、一般的とされるファシリテーターを介した一斉形式に基づくモデル形成を事例分析より行い、芸術作品を媒介とした対話による鑑賞活動の実践形式について、学校と美術館、オリジナル作品と複製作品、一斉と対面等の実践形式の要素に基づき分類し、鑑賞活動を構想実践し、発生する対話の過程と関係から、学習過程の実際を明らかにした。

本研究の発展性は以下のとおりである。本論文が明らかにした、対話による鑑賞活動における学びの過程モデルは、微視的な連鎖過程が生成していく美術作品の鑑賞活動における資質や能力の実践的形成的内実を明らかにしたものである。今後、学期や学年を経て推移し変容していく学びの過程を明らかにすること。また、詩の印象の描画を通じた詩の鑑賞、図的表現を媒介とした算数学習等の教科を超えて対話的に学習過程を構成した活動事例を記述分析することで、本研究で明らかにした対話による鑑賞の学びの過程モデルが内包する汎用的な可能性を示すことである。こうした試みにより、対話的な学習活動の開発と評価を通じた教育実践の臨床的研究のあり方を示すことである。

#### (3) 教育実践への貢献について

①対話による鑑賞活動で児童が、作品の現象と、見方、感じ方、語り方、ふるまい方を形成していく過程と関係を記述分析により明らかにして示したことで、造形的な知識や技能といった内容ベースではなく、資質や能力の観点から芸術教育における学習活動のデザインを教育実践研究として進めるあり方の一部が明らかになった。

②対話による鑑賞による芸術作品の経験は、学習者の表現行為や言語行為を通して現象し、経験され、その過程で表現者の知覚や経験に変容をもたらしている。この他教科とは異なる独自の活動構造を本研究ではこれをテキストモデルとして位置づけている。このテキストモデルにより、対象、他者の行為、共感等の社会文化的な構成過程の視座から学習の過程の関係と過程や、学習の過程で賦活される資質や能力等に焦点化した学習環境デザインと評価を可能とすることが予測される。

### 3. 審査結果

以上により本審査委員会は、本間美里の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。